

明治時代の変化（1868-1912）

（1）松本藩の終焉

1868 年、全国の大名は、京都の明治天皇（1852-1912）中心の明治政府と、江戸の徳川幕府のどちらにつくかの選択を迫られた。倒幕を目指す新政府軍が江戸へ向けて進軍を開始し、松本藩は苦境に立たされることになる。新政府軍はまもなく松本の南の主要道路を通ることになる。幕府に忠誠を誓うか、それとも新政府側につくべきか？議論の末、松本は新政府側につき、数々の軍事的改革も行った。

最後の松本藩主戸田光久（1828-1892）は、「天皇に領土と国民を返す」（藩政奉還）動きに主体的に参加した。光久は 1869 年に領地と大名の地位を返上し、松本藩の藩主に任命された。同じ頃、勅令によって廃仏棄釈の運動が始まった。特に光久は、菩提寺の全久院を廃止し、家臣の葬儀も神式に限るなど、積極的な仏教弾圧を行った。その結果、松本市内の多くの寺院が取り壊され、廃寺となった。

1870 年の秋、松本城に一つの時代の終わりを告げる変化が訪れた。城内に入ることができるのは、上級身分の者や武士、あるいは特別な許可を得た客人だけであったのが、一般市民が初めて城内に入ることができるようになったのである。

1871 年、藩制が廃止された。松本藩は松本県となり、光久は東京に移封された。松本城の管理は陸軍省に移され、後に首相を 2 度務めた山県有朋（1838-1922）が城内に保管されていた兵器を押収するために派遣された。

（2）松本城の一部損壊

松本城の二の丸が県の所有になると、門や土堀、櫓などの多くが取り壊され、建材は別の場所に再利用された。例えば、二の丸の櫓の材木は三の丸の交番に、大手門台の石垣の石は女鳥羽川に架かる千歳橋に使われたと言われている。松本市近郊のいくつかの門は、城下町に起源を持つと考えられているが、その明確な証拠はほとんど存在しない。

松本市出身の社会運動家・作家の木下尚江（1869-1937）は、開智学校在学中に城下の数々の変遷を目の当たりにしている。その時の様子を小説『墓場』で語っている。

「城門の石垣も、堀野土手の大木も、何もかも惜しげなく払い下げられた。ムジナがいたずらで火をつけたとか、三つ目の大入道が出たとか言われたあの大木も、すぐに斧で切り倒された。斧の音を聞いた者は立ち止まり、堀の向こうから見守っていた。根を切る音が聞こえたかと思うと、誰一人としていたまれない気持ちになった。」

2012 年、大手門の中庭付近と、その東側の堀の一部で発掘調査が行われた。その際、非常に多くの瓦が出土したが、これは明治時代（1868-1912）の初期に大手門とその周辺の堀が破壊された際に、瓦がそのまま堀に捨てられたと考えられる。